第１回　全体研究会

日　時：2015年4月17日（金）18：00～20：00
テーマ：「当代中国公民認同及其伝統要素回顧」
報告者：蘇　志宏（西南交通大学政治学院教授）
司　会：高橋伸夫（慶應義塾大学）
場　所：大学院校舎８階　東アジア研究所共同研究室１
使用言語：中国語

【概要】

報告者は国内政治の安定と深くかかわる国民アイデンティティの形成を取り上げ、中国のそれは文化と伝統に対する帰属感に由来するという議論を展開した。そして中国の国民アイデンティティには三つの特徴があるとした。一つ目は、社会が主導するパターンと国家・政府が主導するパターンと違い、近代中国では政党（国民党や中国共産党）がその主導役に当たっている。二つ目は、共産党の指導化ではエリートとくに新興の社会階級をとらえながら社会全体においてアイデンティティ形成を進めるという統一戦線戦略が常に取られている。三つ目に、「道徳共同体」形成の重要性、つまり礼儀（社会的習慣やルール、道徳）と法律の結合が成功するかどうかが、社会の支持を得られるポイントである。これは中国の伝統と深くかかわっているとし、古代の政治思想を振り返りながら、科挙制度の確立や社会講学活動の制度化（つまり儒教を広げるための社会・民間組織の存続）を事例としてあげ、説明を行った。

参加者からは、胡錦濤時代における「以徳治国」が強調されなかった理由、「民主主義」の中国モデルの可能性、中国の国民を「公民」にする条件、人民の積極性とエリートを取り込み両立させる方法などの質問が出された。これらに対し、建国前に毛沢東が下層を重視し、農村における新しい階級を吸収することに成功したことや、胡錦濤時代はイデオロギー論争を避けることを最優先したことの影響など例を挙げながら回答を行った。一方で、現状においては国民の政治参加がまだまだ不十分だというアイデンティティ形成の限界も自ら指摘した。